
スカイ・ホープ

RENKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スカイ・ホープ

【Nコード】

N6383F

【作者名】

RENKA

【あらすじ】

——大航海時代が終わり、新たな時代が幕を開ける。少年は自由を求めその翼を広げる——

Flight 1：飛行機乗りの少年

どこまでも続いてゆく空――

その果てには何があるのだろうか……

まだ見ぬ新天地を求め、

人々は空へと飛び立つ――

「空を飛ぶ」

それは人の永遠の願いであり、

永遠のロマンでもある。

「うん」

少年は目を覚ました。両手を伸ばし、伸びをしてベッドから跳ねるように起きる。

少年の部屋は二階にあり、なかなかの広さがあるが、家具はベッドと机とクローゼットしかない。しかし、床には色々な機械や工具が散らばっており、広さの割には足の踏み場は少ない。机の上も様々な機械で埋めつくされ、設計図らしきものが積み上げられている。ひとつだけ取り付けられている窓からは何処までも続いてゆく草原とまだ暗い空。草原の果ての東の空がぼんやりと黎明を告げていた。少年は手早く着替え、一階へと降りる。

「おはよう。ふあゝ……バズおじさん。」

少年はあくびに手をあてながら一階で料理を作っていたバズという老人に挨拶をした。

「おお、アル。おはよう。」

ここは帝都アークリフトからそう遠くない、フランという村だ。そのフランの外れに小さな工具屋がある。この工具屋にはバズという60近い老人とアルベルトという飛行機好きの15才の少年が二人で経営している。村で物が壊れた時や、村で祭がある際など、工事関係から小道具の修理までと土木工事一切をここで請け負っていた。

「今日はロークさんのところの時計と祭のやぐら作りの手伝いだっ

け？」

アルはキッチンから少し離れたところにあるテーブルに座りながら、今日請け負う仕事を再確認した。

「ああ、そうだな。今日はそれで一日使ってしまうだろうな。」

バズは焼けたパン二つと茶を二杯テーブル運んで

「どっこいしょ」といいながらアルの目の前に座った。

アルがパンにかぶりつくと同時に外でカタンという音がした。

「新聞か、アルとってきてくれ。」

「はあ」

そう言っただけでアルはため息をつき、食べかけのパンを恨めしそうに置いて、玄関のドアを開けた。

「まったく、タイミング悪いなあ。」

そう言いながら家の外に取り付けてあるポストから新聞を取り出し家へと戻る。

「はい。」

「おお、ありがとう」

そう言つてアルは新聞を手渡しすぐに先程のパンに再びかぶりつく。バズは新聞を広げて読み始める。アルはそのバズの読んでいる新聞をぼーっと眺めていた。

「んん!!」

ある記事がアルの目を止めた。別段大きい記事では無いが、それでもその記事はアルの視界に入るには十分な大きさだ。アルの目を止めたその記事には最新型の複葉機の写真が写っていた。なんだろうと思ったバズも新聞をちよつと右に寄せ、アルの見ている記事を見ようとした。

『シュバルツ最新作ついに時速150キロを超える』

記事にはそう書かれていた。

「スゲーや!!さすがシュバルツは違うね。少し前だったら100キロを超えることはおるか、大陸越えだって夢のまた夢だったのに!!」

「また、シュバルツか。アルは本当に好きだな。」

バズは呆れた口調で言う。

5年前まだアークリフトで飛行技術が発達していないころ、アークリフトは北方にある群島諸国と戦争をしていた。やがて戦争が激化してくると、群島諸国は飛行機から攻撃するという行動に出た。

それまでの戦争は海上や陸上での戦闘が主体で初めての飛行機を使った戦闘にアークリフトはなす術が無かった。

だが群島諸国はさすがに大陸の全土を治めるアークリフトを落とすことは出来ず、アークリフトはすぐに対抗策を立ち上げる。

それが群島諸国に対抗してアークリフトが作った空軍『シュバルツ』である。

元は空軍の名前だったが、アークリフトの人間にとって飛行機という概念が無かった為、人々は飛行機のことを総称してシュバルツと呼ぶようになった。

そして、空軍シュバルツとアークリフトが秘密裏に開発していた魔術兵器が投入されたことによって群島諸国との一年に及ぶ戦争は終結した。

その後アークリフトは飛行技術をメキメキとつけてゆき、空軍の名前がそのままメーカー名となった『シュバルツ』は今では世界の飛行機のトップメーカーとなったのだ。

「俺、絶対空軍に入る！」

アルはテーブルに腰をかけ、両手をギュッと握りしめた。

「ハイハイ。わかったわかった。もう何度も聞いたよ。」

バズは再び呆れた口調で言った。アルは毎回口癖のように空軍に入ると自分の夢を語る。一緒に暮らしているバズはそれを何度も聞いている為、いい加減聞き飽きていた。

空軍に入るためには特殊な教育や訓練を必要とし、更に帝都の上級階級の学校の優秀な生徒しかねないため、こんな田舎で育った平民のアルが普通に考えて空軍に入れる可能性は無い。

しかし、空軍にはスカウト制が設けられており、飛行機を持っていて尚且つその技術が優れている者を年に2、3人。空軍へと招き入れている。

アルはそこに入り込むためにこの工具屋で稼いだ金で飛行機の部品を少しずつ買い、工具屋の裏にあるガレージで飛行機を作っているのだ。

「あと少し！あと少しで完成するんだ！来年の今ごろにはもう乗れるハズなんだ。」

アルは来年の今ごろを想像して飛び回った。飛行機に乗る自分の姿がイヤでも目に浮かび、じっとしていられないのだ。バズはそれを暖かい目で見ている。バズが新聞をたたむと新聞の間から手紙がヒラヒラと滑り落ちた。

「はて？」

バズはそう言つて手紙を取つてみた。手紙には帝都の郵便の印が押してあり、アークリフトから来たものだと一目でわかるようになっている。バズは手紙を開いてみた。

「お前宛てだな。アークリフトに飛行機の部品が届いたんだろう。今日はワシ一人でも作業は間に合う。取りに行つてこい。」

そう言つて手紙をアルに渡す。アルはそれを強引に奪い、瞬きひとつせずに手紙を読んだ。そして

「よっしゃー」と雄叫びを上げて

「おじさんありがとう」と言い、駆け足で二階へと上がつて行つた。アルは二階に上がるとすぐに身支度にとりかかった。クローゼットを乱暴に開き、中から革製のジャケットとズボンを取り出し着替える。そして机の脇においてあるショルダーバッグを取り、中に入つていた工具を放り投げ、代わりに机の奥に無造作に入れて貯めてあつたお金を財布に突っ込み、その財布をバッグにいれた。

「よっしゃー！！ついにエンジン導入だぁー！！」

アルはエンジンのついた自分の飛行機を想像すると自然と足取りも軽くなり、滑るように階段を降りた。

アルの飛行機は作り始めてからもうかれこれ5年になるうとしていた。工具屋で働いているため、組み立てるだけなら1ヶ月とかからないのだが、飛行機を作る金を集めるのにすごい時間をかけていたが、それも既に8割型完成というところまできた。あとはエンジン

と複葉機の羽の上下を繋ぐワイヤー、細かい計器などが揃えば完成だった。

「じゃあ行つてきます。」

アルは右手でドアを開けながら左手でバズに向かって手をヒラヒラさせた。

「おう、行つてらっしゃい。」

アルはまだ夜が開けていないフラン村に出た。さすがに畑仕事や家事をするには早い時間なので村に人影は少なかった。

「おい！アル！どこ行くだよ！！」

工具屋から村の出口へ向かっているアルを呼び止めたのは村の友人のテッドだった。テッドは村の一農家の息子で両親が軽い性格なので、自然とテッドも性格は軽い。その為色々なことに首を突っ込みたがる。

「おお！テッド。おはよう。」

アルはテッドにもヒラヒラと手を振りながら足を止めることなく過ぎてゆく。一刻も早く帝都に行きたいのだ。

「おいおいおい。待てって。」

そのまま過ぎ去ろうとするアルをテッドはひき止めた。アルはようやく足を止めた。

「こんな朝早くからどこに行くんだよ。」

「ああ、ちょっとアークリフトまで」

「帝都に？何しに行く……ああ飛行機か。」

アルの様子を見てテッドはピンときたようだった。

「っていつかよくやるよなあ。空なんてどうでもいいと思うけどなあ。」

「お前にはそうかもしれないけどな。でも、俺には空が必要なんだよ。」

そう言っただけでアルは空を見上げた。東の空が明るくなり始めた空に目を覚ました小鳥が頭の上を横切る。それをアルは眺めていた。

「おい。行くんじゃないのか？」

空を見上げたまま放心状態になっているアルにテッドは声をかける。その言葉にアルはビクツとした。

「ああ、そうだった。じゃあ行ってくる。」

そう言っただけでアルはまた手をヒラヒラさせて村の出口へと向かった。

「あいつホントに空が好きだな。」

意気揚々と歩いてゆくアルの後ろ姿を見てテッドはそう呟いた。

テッドと別れたアルはそのまま村を出た。アークリフトまでは東に15、6キロ。徒歩でいたい3時間くらいだ。

帝都周辺は広い草原で別名グラスランドとも言われている。この大陸『アークリフト』は300百年前までは戦乱の耐えない大陸だった。しかし、300年前に大航海時代が訪れ、海に近かった現在の帝都アークリフトは商業を中心に栄え、国力をつけた。そんなアークリフトが大陸内部の国に負けるはずもなく、着々と周辺の国を配下に加え、百年後には大陸全土を治めるに至る。そして現在は帝国アークリフトとなり、世界有数の都市となった。

東から太陽が上り、まだそう時間もたっていないのにアルはもうすでに帝都が見えるあたりまで来ていた。

「大分早く来すぎたなあ。普通に歩いてきたつもりだったのに…。
昼前に着くくらいだと思ったんだけどなあ。」

とかなんとか言いつつも、アルの歩く速度は変わらなかった。むしろ早くなっている。

朝の街にだんだんと活気が出始め、夏の日射しが暑く感じ始めたころにはアルは帝都の城門をくぐってしまった。

「ハア、ハア。え」と

アルはそう言うのとバグから今朝届いた手紙を取り出し発注先の住所を確認する。

相当な速度で歩いてきたので息は切れているが、自然と疲れは感じない。最も感じないだけで実際はかなり消耗している。要するに疲れがマヒするほど気持ちが昂っている状態だ。

「四番街か…」

アルは地図をしまい、四番街の方へと歩き出した。

アークリフトの街の作りとしては中心に城があり、城の周辺には上流階級の貴族たちが住んでいる。

東西南北を角にして四角形の形に城壁で囲まれており、東地区、西地区、南地区、北地区に別れている。東が商業地区で一番街。北は居住地区で二番街。西は軍用地区で三番街。南は工業地区で四番街と大まかに別れている。

何故このような変わった作りになったかと言うと、昔大陸で戦乱が絶えなかったころの名残なのだ。商業地区と居住地区には海が面している。それは大陸内部の国が攻めてきた際に民の安全を確保するためだ。昔のアークリフト王は戦争が起きると民を海へと逃がし、安全な岸で下ろして身を隠させていた。アークリフトに面している海は湾になっており、航海技術が発展していない当時でも湾の端の半島に向けて船を進めれば遭難することはなかった。そうして非戦闘員を上手く逃がすことで被害を最小限にし、人口の減少をおさえた。

かわって商業地区は航海技術が発展して他国との貿易が発達したために新たに設けられた。そのころにはすでにアークリフトは大陸で最も屈強であり、帝都まで攻め込めるような力を持った国はなかったため、単に利便性を考えて海のすぐ傍に作ったのだった。

アルは四番街の門をくぐり。キョロキョロとあたりを見回すと、門のすぐそばで露店をやっている作業服のような格好をした男に声をかけた。

「すみません。工房ニルドってところに行きたいんですけど。」

「ああ、それならこの通りを二つ目の角を左に曲がればすぐ見えてくるよ。」

「ありがとうございます。」

アルはそうお礼を言うと露店の並ぶ大通りを歩きだした。普段のアルなら露店に興味津々だろうが、今のアルにはそんなもの目に入らなかった。

アルはアークリフトには年に数回ほどやって来ては工具屋で使う道具を買いに来たり、飛行機の材料を買いに来たりする（主にこつちの目的の方が多い）その為、色々な工房と面識があるのだ。昔、金のかかる部分の材料を少しわけてもらったりもした。

しかし、今回のエンジンは飛行機の部品の中でも一番高く、わけてもらうわけにもいかないので、面識のある工房を回り、ブランドルという名前の工房で発注してもらった。その時に、できるだけ安く手に入れるため相談を持ちかけたところ、アークリフトに比べて物価の安いジークリンデから輸入するのが一番だということになった。アークリフトでは飛行機エンジンの製造はシュバルツのみで行なっていて、その全てが軍に買われるので一般人の元には出まわらない。例え出まわったとしてもアルが買うためには後5年は働かないと買えないだろう。

ブランドルの工房主は友人のコネを使ってみると言って探したところ、挙がった発注先が工房ニルドだった。工房ニルドはジークリンデ女王国の工房との交友があり、ブランドルの工房主が頼んでみたところ、OKをもらったので、発注してもらうことにした。アルは今回初めてこの工房を訪れる。

工房前まで来たアルはしばらく工房ニルドの外観を眺めていた。外国との交友があると聞いていたので、一体どんな工房なのだろうと期待していたのだが、

工房ニルドの外観はそこの普通の工房と同じで、大きさに至ってはアルの家よりも小さかった。

内心ガッカリしながらもアルは扉を押した。

「こんにちは」

中の様子確かめながら恐る恐るゆつくりと扉を開ける。

中にはところ狭しと機械が置いてあり、見たことの無いような機械やなんに使つのかわからない形をした鉄のパーツが天井近くまで山積みになっていた。そのせいで工房主のいるカウンターまで山を避けながら蛇行して進まなくてはならなかった。

「いらっしやい。悪いねこんなところで。」

30代後半くらいの工房の亭主が山を避けながらカウンターへ向かってくるアルに言った。

「いやいや、見たこと無い機械ばかりで……。ちょっと触ってみてもいいですか？」

やつのことでカウンターまで辿りついたアルは目を輝かせながらキョロキョロとあたりを見回す。ゴミの山が宝の山に見えるタイプだ。

「おお、少年。話が分かるな。いいよ、好きなだけ触りな。」

亭主がそう言うや否やアルはカウンターのとなりにあつた機械を触る。

「まったくこちらの奴等は外国からの機械にてんで興味が無いみたいだよ、今じゃゴミ屋敷なんて呼ばれる始末だよ。」

アルが色々と機械を見ながら

『へえ』とか『なるほど』とか言っているのを見ながら亭主はぼやいた。

「ところで少年。ここには何しに来たんだ？」

アルはカウンターの近くの山をあさっていた腕を止めハツとした表情をした。

「あゝ、忘れるところだった。」

そう言つてアルはバッグから手紙を手渡す。

「ええ！？少年がああのエンジンの注文をしたのか？」

「そうだよ。そのエンジンとあとは計器をちょちよいと組めば完成なんだ。」

「その歳で飛行機乗りとはね。」

亭主はアルを覗き込むようにカウンターから身を乗り出した。アルのような少年が飛行機乗りになることは珍しいのだ。

「それでエンジンはどこにあるの？」

関心した様子の亭主にアルが尋ねると、亭主は少し困った顔をした。

「それが、まだ届いてないんだよ。」

「ええ……!!」

驚き、落胆するアルを見て亭主は慌てて言葉を付け加える。

「い、いやあ、まさかこんな朝から来るとは思ってたなくてね。もうすぐすれば届くと思うんだけど……」

そう亭主が言うや否や工房の入り口が開いた。

「こんちゃ～す。」

20代前半くらいで黒髪の身長は180くらいはある男が入ってきた。何か大きな袋を担いでいる

「来たな。」

亭主はニヤリと笑って男を見る。男は先程アルが避けてきた山を同じように避けながらカウンターの前まできた。

「コイツが頼まれてたヤツ。」

そう言つて男がカウンターに袋を置き、その袋を取ると、中からは光沢のある鉄の機械が出てきた。アルの目はその機械に釘付けになった。

その機械はまぎれもなくアルが注文したエンジンだった。

「しかし、こんな安いエンジンどうすんのかね。いくら飛行機用つつてもコレじゃスピード出ねえぞ。」

それを聞いてアルはムスツとした。質問を投げられた亭主は気まずそうにアルを見る。

「おい！それは俺のだ！あんまりバカにすんなよ！！100キロの機体が上昇するために必要な抑揚はこのエンジンでも十分じゃないか！！」

アルは思わず噛みついた。男はカウンターの横にいたアルを見ると驚いたような顔をした。

「お、お前飛行機乗りなのか？」

「いや、まだ作ってる段階。乗るのは来年。」

アルは素っ気なく答えた。男はアルの返事を聞くとへえと関心したようだったがすぐに甘いなという表情をした。

「でもよ、コレじゃ抑揚は得られても急旋回は出来ねえ。旋回の最中に失速して墜落だ。」

「ああ、だから改造するんだ。エンジン構造にプラスしてピストンを組み込む。そうすれば馬力は二倍にまで跳ね上がる。多少無茶だけど、金もないし……。でも俺の家は工具屋だから出来ないこともない」

男も亭主もなるほどと言う表情をした。そして男は顎を擦りながらアルを覗き込んだ。

「お前、なかなか面白いな！俺はイーグル。お前の名前は？」

「アルベルト。アルでいい。」

アルはイーグルに対してそっぽを向きながら答え、亭主との勘定を

すました。

「よっしゃ、アル！ちよつとついてきな。」

そう言つてイーグルはアルの腕を掴み引つ張つて行く。

「うええ！？　ちよ、ちよつと、どこに行くんだよ？」

イーグルは工房の入り口の扉に手をかけながら答えた。

「俺の機体に乗せてやるよ。」

Flit2：最速の青年

「ええ！？アンタ飛行機乗りなのか？」

アルは驚いて言った。確かにイーグルの聞いてきたことは専門的なことだったが、まさか本職だとは思わなかったのだ。

「そうさ、運び屋をやってる。運び屋イーグルと言えばちょっとは名が通ってってるんだがな。」

イーグルは多分知らないだろうなという口調で話した。

「運び屋って一体何を運ぶの？」

「ああ、何でもだ。基本、飛行機に積めるものならなんでも運ぶ。手紙、食料、美術品…。レビノ・シューレルの新薬なんてのも運んだな。」

イーグルは右手の指を折りながらアルに聞かせる。そしてアルの腕を放し振り返った。

「アル、お前空飛んだことないんだろ？」

アルは黙って頷く。それを見たイーグルはにっこりと笑う。

「俺が乗せてやるよ。」

そうやってイーグルはアルを三番街の軍用地区へと連れてゆく。軍用地区に入るには軍隊に所属しているか、あるいは、航空証明を持つていないと入ることが出来ない。

航空証明とは他国に着陸する際に自分の身元を証明するためにあり、飛行機を移動手段として使う者は必ず所持していないといけない。イーグルは三番街の入り口の検問まで来ると航空証明を見せた。

「おお、イーグル。もうエンジンは届けたのか？」

「ああ、コイツがその発注者。飛行機乗りになるんだと、んでコイツを俺の機体に乗せてやりたいんだけど、入ってもいいか？」

「へえ、こんな少年がね。まあでもお前も大差ねえけどな。……いぜ。お前とは付き合いも長いし、特別だ。」

そうやって男は検問のドアを開ける。

イーグルと検問の男は顔見知りのようだった。本当のことを言うと実はアルもこの男を知っていた。二年くらい前に軍用地区にしかない滑走路や、シュバルツを見るためにこの検問で懇願したのだが、門前払いをされた。

その当時は戦争が終わってそんなにたっていなかったため警戒が厳重だったのもあるが、もつとも航空証明を持っていないアルを入れることなど出来なかった。そのためアルは泣く泣く諦めたのだった。今では警戒も大分緩んで来てはいるものの、再チャレンジする勇氣はなかった。そのためさっきこの検問を抜けた時、どうもその時のことを忘れているような男に『どうか思い出しませんように』と、

ずっと祈っていた。なので検問無事通過出来たアルは内心で安堵していた。

検問を抜けるとすぐ、1キロくらいある滑走路が目に見え込んだ。

「うわあ。スゲー！俺……今、滑走路にいるのか！」

呆然とアルは滑走路を眺める。いつかここに立つという夢が現実になり、声が震えた。

「おい、アル！こっちだ！」

そんな様子を見ていたイーグルは満足そうにアルに声をかける。イーグルは検問から左手へと向かい、その先には飛行機をしまうためのガレージがあった。このガレージは民間用で、空軍用のガレージはもっと奥にある。アルとイーグルは手前の民間用ガレージに入る。ガレージの中には六機の飛行機と四人の飛行機乗りらしき姿が見えた。四人はイーグルの姿が見えると皆尊敬の眼差しでイーグルを見る。イーグルは挨拶をしてくる飛行機乗りに『おう』とか『よう』などと適当な挨拶で答える。

「イーグルって偉いのか？なんかみんな挨拶してくるけど……」

「ん、まあ別に偉くはないんだけどな。ただ飛行機乗りの中では」

最速のイーグル』って異名がついてるから有名なだけだ。」

「ええ！？ 最速！？ イーグルが！？」

「そう、最速。」

驚いて固まっているアルに別になんでもないじゃねえかという口調でイーグルは答える。

「じゃ、じゃあ機体はシュバルツなの？」

「シュバルツう？俺が乗るのはあんなじゃねーよ。」

そう言つてイーグルはガレージの奥の方にある朱色の飛行機のところへアルを連れて来た。

「コイツだよ。」

その飛行機は群島諸国のモデル『スピリットフレア』だった。このモデルは群島諸国とアークリフトが戦争をしていた頃、群島諸国が多用していた機体で古いものでは無いが、最速を語る上でこの機体がシュバルツに勝ると思えなかった。

「これってスピリットフレアじゃないか。今のシュバルツは150

キロも出るんだぜ？こんな昔の機体で150キロ以上なんて出るワケないじゃないか。」

アルはシュバルツか、もしくはシュバルツの更にも上をゆく機体が見れると期待していた。しかし、目の前の機体は一世代前の飛行機。アルはがっかりと言わんばかりに肩を落とす。そんなアルの様子を見ていたイーグルは自信たっぷりに答える。

「乗ってみりゃわかる。」

そういつてイーグルは座席から鷹の絵が描かれているヘルメットと銀色のいたってシンプルなヘルメットを取り出す。

「ほれっ、お前のだ。」

そう言つてイーグルは銀色のヘルメットをアルに投げてよこす。アルはヘルメットを受け取ると銀色にうつすらと映る自分の姿を見る。そしてスピリットフレアを見る。先程がっかりと感じた機体は今、喜びと期待しか感じさせない。鼓動が早くなるのを感じた。アルはその高鳴りに合わせるように軽くジャンプしてスピリットフレアの後部座席へと乗り込む。

「準備OK」。」

「おいおい、得意のシュバルツはどうした？」

イーグルは意地の悪そうな声を出す。

「いいから早く出してくれよ。」

アルは餌を前に待てと言われた犬のような顔をしている。今はシュバルツよりもなによりも空を飛ぶことに意識がいつてしまっているのだ。

「くつくつく、いいぜ。行こうか。」

イーグルはそう言うと言った機体のエンジンをふかす。心地のいい振動がアルの体に伝わり、機体はゆっくりと前へと進みだす。周りにいた飛行機乗りはガレージの入り口までの進行方向の邪魔にならないように、左右からイーグルのスピリットフレアを眺めている。ガレージから差し込む光にスピリットフレアが機体の先端からゆっくりと照らされると、滑らかなで光沢のあるフォルムが映える。スピリットフレアはガレージを出て、今、ゆっくりと滑走路に入った。

「行くぜえ。」

イーグルはそう静かに言うと言ったエンジンのスロットルを引き上げた。すると、今まで一定のリズムを刻んでいたエンジン音は豹変し、心地よい振動も荒々しくなる。加速によるGで背もたれに体が押し付

けられるが、むしろアルはその感覚を身に刻むかのように味わった。やがて、50メートルくらい加速すると不意に車輪の音が消え、体が浮遊感に包まれる。

スピリットフレアはアークリフトの空へと飛び立った。

「飛んでる！！飛んでるよ！！！」

初めて味わう浮遊感にアルは歓喜の声を上げる。顔に当たる風で開けづらい目を必死にこらしながら辺りの景色を見ようとする。

「ハハハッ。次からはちゃんとゴーグル用意しときな。飛行機乗りとしての常識だぜ！」

そう言っただけでイーグルは離陸している最中だというのにアルの乗っている後部座席の方をふりかえり、アルに見えるようにいつの間にかしていたゴーグルを、右手の人差し指でコツコツと叩いて見せる。

「汚ねえーぞお！！自分だけ！！！」

そう言いながらもアルは周りの景色に夢中らしく、すぐに外を眺めるのに戻る。

上昇の角度にあわせて斜めに傾いた景色は地平線の果てまで続いて

おり、アークリフトの城の後ろにある海は太陽の光に照らされて、キラキラとダイヤのように輝いていた。ここでイーグルは機体を水平に保ち、片手で操縦桿を握りながら再び後ろを向く。

「なあ、アル。今のシュバルツって何キロ出せるんだあ？？」

イーグルは小バカにしたような、ナメた口調でアルに話しかける。それを聞いたアルはまたムツとなる。

「今のシュバルツは最高時速150キロ。高度は700メートルで……」

アルがそこまで言うといーグルはそれを手で静止させる。そしてアルに指で合図して計器を見るように促す。アルは前のめりのような姿勢でその計器を見る。

「行けぜ！！イヤッホオオオウウ！！！」

イーグルはそう叫んでエンジンのスロットルを限界まで引き上げる。するとエンジン音がまるで野獣のうなり声のような音を上げ、スピリットフレアは一気に加速した。その加速によって、前のめりで計器を見ようとしていたアルの体は座席に引き戻される。

「うわっ、う、うわあ！！！」

グオオオオ！！という音と共にスピリットフレアは尚も加速し続ける。そして加速によって慣性でその場を保とうとしている体に悪寒が走る。そんなおっかなびっくりしている中でもアルは計器から目を離さなかった。

100…150…200…220…240！！

240キロまで達するとイーグルはスピードを落とすはじめた。

「どうだ？」

イーグルは満足げに振り向く。

「すげーや！！なんでこんなスピード出るんだ？」

アルはシートにしがみついたまま、でも表情はキラキラとした表情でイーグルに聞いた。

「そりゃあ、俺が特別に改造を施した機体だからな。ま、要するに世界は広いってワケだ。軍が一番技術が進んでるなんてのは偏見だぜ？」

「すげー！！すげー！！！！シュバルツよりも早い機体を自力で作るなんて、俺イーグルのこと尊敬したよ。」

イーグルはちょっと照れくさそうに頬を人差し指で掻き、前を向き直った。するとすこし神妙な口調でアルに聞く。

「なあ、アル？アルはなんで空を飛びたいんだ？」

景色を眺めていたアルは前に向き直る。前の座席に座っている黒髪の青年からはどことなく寂しそうな雰囲気漂ってくる。その空気にあてられたせいか、ふっと、アルも死んだ両親の顔を思い出した。そしてアルは語りだす……。

「俺、昔っから空が好きだったんだ。フラン村はグラスランドでさ、よく草原に寝そべりながら空を見てたんだ。その時は空を飛ぶなんて考えたこと無かった。でも8才の時、群島諸国で俺より5、6才しか変わらない少年が世界で初めて空を飛ぶ飛行機を作ったって聞いてさ、いても経ってもいられなくなつてさ、そこから必死に飛行機の勉強したんだ。でも2年後に群島諸国から空襲があつて、丁度帝都に出かけてた父さんと母さんは巻き込まれて死んだ。まあちょっと飛行機がトラウマになったんだけど、空は嫌いにはなれなかったんだ。で、空を見てるとどうしても飛びたくなる。そして気が付いたら性懲りも無くまた飛行機をいじってたんだ。」

アルはいままで周囲に空について真面目に語り合える人間がいなかった、例え語ったとしても理解してもらえそうもなかったのです。と胸にこの想いを秘めていたのだがイーグルならば理解してくれる気がして淡々と寂しさを帯びた声で語った。そこまで話すと一気に肩の荷が下りたような気がした。

「……なんか悪いこと聞いちゃったな。」

イーグルは前を向いたまま答える。

「い、いいよ別に気にしなくても。」

妙にしおらしくなってしまうたイーグルにアルは慌てる。

「けどよ。」

そう言つてイーグルはまた片手操縦で後ろを向く。

「俺がお前の立場だったら多分……俺も同じように空を飛ばうとしてるだろうな。」

そう言つてイーグルはまたにつこりと笑った。アルはそう言ったイーグルを見てると自然と安堵の笑いが込み上げてきた。

「はははっ、なんか俺達って似てるね。」

アルが笑いながら言う。そして二人は昔やかしたヘマの話に華が
さいた。アルは回路の繋ぎ方を間違えてガレージが半壊して死にか
けた話、イーグルは飛行中に鳥が顔面に直撃し失神してそのまま海
に突っ込んだ話をした。

空の上で楽しそうに話す二人はまるで仲のいい兄弟のようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6383f/>

スカイ・ホープ

2010年12月1日08時36分発行